

【主題】 社会につながる「学び」と「価値」を創造する児童の育成

【副題】 (なし)

【学校・団体名】 兵庫県南あわじ市立賀集小学校

【役職名・氏名】 校長 中田 勝之

1. はじめに

本校では、これまで「自分たちの住む地域」がどのようなプロセスで「ふるさと」になっていくのかというテーマで研究を行ってきた。この地域に住んでいる子どもたちに、そのコミュニティーの一員としての自覚と行動が生まれるということは、言い換えれば「住民」から「市民」になっていくことでもある。

また川喜田二郎は、『ふるさと』とは、子どもが大人になる途中で、子どもながらに全力傾注で創造的行為を行ない、それをいくつか達成した、そういう達成経験が累積した場所が『ふるさと』になる。」と述べる。川喜田の定義をもとに考えると、子どもたちにとっての「ふるさとの形成」とは、子どもたちが地域の中にある「ひと、もの、こと」との豊かな関わりを通して地域の現状をみつめ、地域の一員として未来を創造していくプロセスといえる。

一方、ロジャー・ハートは、「コミュニティーづくりにおける子どもの参画」が、子どもたちの想いや意見が反映されない「あやつり、おかげり、形式的な」活動に陥りやすいと指摘する。実際、目の前の子どもたちの地域における活動は、大人によってあらかじめ決められた活動や、その場の指示による活動が中心となっており、子どもたちも日常的に大人の指示を待つような受け身の態度に育っていた。また自分たちの地域における問題に対しても、どこか他人ごとのような態度の児童も見られた。

そこで本校における「ふるさと教育」を、地域の歴史や文化を学ぶことだけに留まらず、「子どもたちの試行錯誤できる場」および、「子どもたちの主体的な活動が生まれる場」を設定することを通して、「ふるさとを形成していく資質能力の育成を目指すカリキュラム」へと修正を図ることとなった。

2. 本研究について

ロン・バーガーは「学習者の取り組みへの熱意」と、「その取り組みに対する外部からのまなざし」との関係性について述べている。子どもたちの「取り組みへの熱意」が最も上がりにくいのは、「教師のための提出物」であるとし、そこから「保護者」、「学校内での発

表」、「学校外の一般の人への発表」、「専門家への発表」「世界（社会）で実際に役立つ」と他者意識の階層が上がるに従って、モチベーションも高まっていくと述べている。



図1 オーディエンスのヒエラルキー

Berger, Ron(2014) 『Leaders of Their Own Learning』 Jossey-Bass P216より引用し、翻訳および一部改変し作成

そこで本研究においては、総合的な学習の時間を中心としたふるさと学習において「オーディエンスのヒエラルキー」の上位の階層を意識的に取り込み、児童の学習に対するモチベーションを高めたり、維持したりしていく仕掛けや仕組みづくりを行った本校6年生の実践について報告する。

3. 実践の内容

(1) セタプロジェクトマップングをつくろう

プログラミング言語ビスケット (viscuit) に慣れ親しむ学習を終えた後、「テクノロジー×学校行事を通して新たな学校の文化を築こう」という年間を通した総合的な学習のテーマを想起させた。

そしてプログラミングによる表現そのものを目的とするのではなく、「1・2年生の七夕集会で星空の中で七夕飾りのできるような仮想空間」を学習の成果物として子どもたちと共有した。先に挙げた図でいうと、オーディエンスヒエラルキーとしては、「学校内のコミュニティー」の階層に該当する。



図2 新しい七夕集会の提案

実際の活動としては、前時に共同作成した仮想空間「海の世界づくり」が技術的な足場となっている。「七夕プロジェクションマッピングを作るためには、どのようなアイコンを作成し、どのように動かしていったらいいのだろう」と、グループの中で課題解決に向けた相談場面が見られた。

以下、プロジェクト終了後の子どもたちの振り返り作文である（一部抜粋）

- ・コロナで七夕集会などみんなが集まってできないけど、ZOOMで講堂の様子を見ていたとき、低学年の子の「わあ」という声が挙がったのが聞こえてきてとてもうれしかった。
- ・自分たちの使えるテクノロジーを活用することで、新しい文化を自分たちもつくっていけるということを知った。他の場面でもやってみたい。

上記の作文から、「他者からのまなざし」を意識しながら作品づくりを進めた様子や、自分も文化の継承や文化を生み出していこうとする社会参画の意識が読み取れる。このようなオーディエンスを明確にした「ものづくり」は、作品のあるべき姿を考えたり、その作品の価値について、実際のフィードバックをもとに感じることができたりと、子どもたちにとって手応えが得られる活動につながった。

(2) 「淡路人形浄瑠璃」演目カルタづくり



図3 「傾城阿波鳴門」の演目カルタ

南あわじ市では、地域の強みであり課題でもある淡路人形浄瑠璃をトピックとした「コアカリキュラム」が教育過程に位置づけられている。地域の伝統文化をどのように継承していけばいいかを大人から一方的に学ぶのではなく、大人も子どもも一緒になって考えたり、悩んだりする場を設定することを通して、子どもたちに身につけさせたい資質能力を育成していくプロジェクトである。

さて高学年においては「淡路人形浄瑠璃の演目」をトピックとした学習単元が位置づけられており多種多

様な演目について①整理、②分析、③まとめ、④発表するというプロセスが示されている。

そこで本校では、話し合いの中で伝えたい対象を1・2年生に設定した。このような具体的な他者意識の設定により以前より明らかに、明確な見通しが立った。子どもたちは演目カルタを作成し、遊びを通して「淡路人形浄瑠璃」の演目に触れ、そのストーリーに対する興味関心を引き出したいと計画を立てた。

以下、子どもたちの学習の流れである。

- ①人形浄瑠璃の演目を集め、整理方法を検討する。
- ②協働作業を通し、演目の結末が明るいか暗いかという軸、恋を扱うもの否かという軸でポジションマップを作成する。

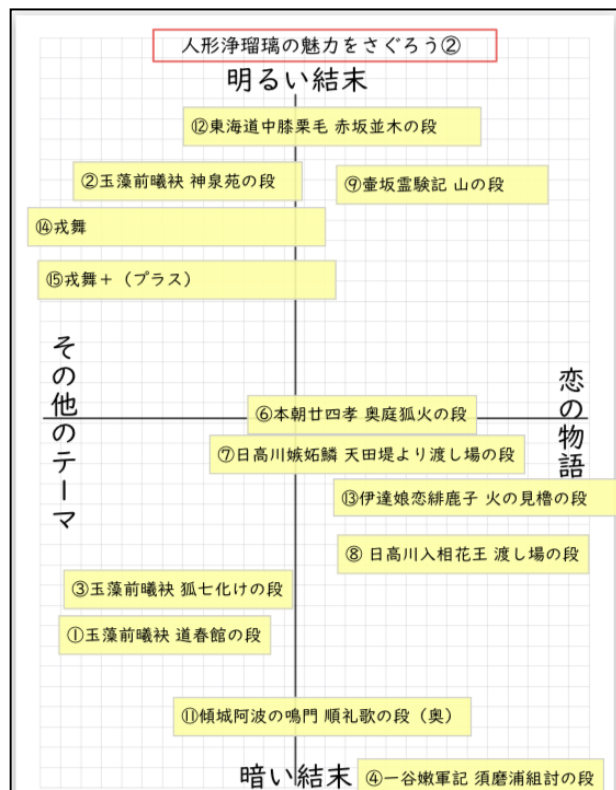


図4 人形浄瑠璃の演目の分布図

- ③淡路人形座で実際の演目を見せてもらう。
- ④その魅力を肌で感じる事ができた演目「傾城阿波鳴門」をカルタにして下級生に関心を持ってもらうという計画を人形座の人に聞いてもらい、アドバイスをもらう。
- ⑤50音の中から担当を決め、読み札を作成する。
- ⑥動画の中から読み札のシーンに合うものを静止画として取り込み、取り札を作成する。
- ⑦図工で版面をする際、演目カルタを版面で作りたいと軌道修正が行われる。
- ⑧演目カルタが完成し、実際に教室で遊んでみる。
- ⑨1・2年生の教室でカルタ大会を開く計画を立てる。

上記の流れでプロジェクトは進んでいたが、コロナの感染防止の観点から、直前になって異学年との交流が禁止され実際はカルタ大会の開催には至らなかった。

しかし、以前のような発表会で終わる学習とは明らかに異なり、④以降においては、国語や図工の時間など他教科においても学習を「演目カルタづくりに活かせないか」という意識が子どもにも教員にも見られるなど、教科横断的な学習につながる展開が生まれることとなった。

(3) 校舎改築での感謝の動画上映会

賀集小では2年間にわたる校舎改築が行われていた。学級会で夏休みに最後の工事が行われることを知った子どもたちから、「感謝の想いを伝えたい」という声が出た。

子どもたちがまず取り組んだのが、朝夕の放送である。今日の予定や天気に加え、工事現場の職人に熱中症予防の声かけや、各学年から募集した感謝の手紙を読み上げた。

夏休みが明け、新しい校舎に登校した子どもたちは、感謝の放送番組を作成し動画上映会の企画を始めた。



図5 子どもたちが作成した放送番組

しかし、いきなり立ち止まることとなる。「職人以外の誰に感謝を伝えたら良いかわからない」というのである。つまり、改めて考えてみれば、「この工事にどんな人が関わったのか自分たちは知らなかった」という自己認識につながる事となった。

子どもたちは、校長室に行き情報を調べ始めた。計画案など初めて見る資料を手にし、本当に多くの人が関わっていたということを知った子どもたちは、次に上映会の招待状を書き始めようとする。しかし、今度は、招待状の書き方がわからないといってまたもや頭を抱えることになる。

このように、この子どもたちの「〇〇したい」という想いは、次から次へと新しい課題解決のサイクルにつながっていった。「〇〇したい」でも「どのようにしたらいいかわからない」、あるいは「やり方は分かるけど、不安」など一人ひとりにとって切実な課題を自覚

した学びがあちこちで展開されながら、感謝の動画上映会までこぎつけたのである。

(4) 命と向き合う仕事に感謝～地産地消給食～



図6 淡路島レザーにはさみを入れる児童

地産地消給食「淡路島ビーフゴロゴロシチュー」をトピックに教科横断的な学びができないかと計画した。そこで、外国語の学習と関連付け「地産地消給食」に関わる全ての方へ感謝が伝わるように自分たちの得意なショート動画を成果物として設定し、多くの関係者に届けようということとなった。

結果として、このシチューが届くまでに、どれくらい多くの職人が関わっていたのかという気付きに加え命と向き合う仕事に対する差別意識などについても考えることのできる間口の広い学習となった。

特に、地域の酪農家、牛乳石鹸、淡路牛の皮革を使ったレザークラフトなど、淡路島ビーフという1つのトピックから派生的に様々な職種や地元在住の職人とつながるなど一次情報を中心とした、まさに「地域の強みを生かした学習」が展開された。

(5) なんべんも行きたくなるなんべっさんプロジェクト

200m先でも車で移動するときと言われる島民の運動意識の低さ。また昔は淡路五山として、地域の人にとって身近で登山道としても魅力的だった南辺山も、現在ではその魅力が知られていなかったり、山道にはゴミが捨てられていたりといった現状を、実際に登って目の当たりにした子どもたち。

これらの地域の課題を同時に解決できないかと考えた子どもたちは、南辺寺の住職と一緒に課題解決プロジェクトを立ち上げた。



図7 なんべんも足を運んだなんべっさん

現役トライアスロン選手でもある住職と一緒に「地域住民が昔のように登山を楽しめる場所にしたい。」という想いで「なんべんも行きたくなるなんべっさんプロジェクト」と子どもたち自身で命名した。

まず南あわじ市の「子ども議会」において自分たちの取り組みへの協力を依頼した。反応してくれたのが地元企業の森長組だった。先に述べた感謝の動画上映会に招待され、「賀集小の子どもたちと一緒に何か地域貢献できる事業を起こせないかと考えていた」という誰もが思ってもみない電話がかかってきたのである。

子どもたちは、住職の強みである「体作り」と、森長組の強みである「土木事業」、そして自分たちの願いを組み合わせ、「登山が楽しくなる看板づくり」の企画を始めた。

何度も試作品の看板が作られ、学校の廊下に試作品が並べられた。ネット上にある看板を集め、整理、分析しながら、南辺山の登山道にふさわしい看板のデザインや文字を考えた。また議論の中で「ゴミを捨てるな」というような注意喚起ではなく、「山頂を目指す人への意欲づけ」を目的にしたいというのが、子どもたちの最終的な合意となった。この期間、子どもたちが向き合ったのは、「地域がどんな地域であってほしいか」という自分たち自身に向けた問いであった。

また問題は、デザインだけではなかった。安全面の問題、法律の問題、土地の相続等による持ち主不明の問題など、看板を設置するのがこんなに難しいのかと子どもたちと大人が一緒になって悩み続けることになった。登山道に自分たちの看板が並ぶことになるまでに半年以上の時間を要することとなった。



図8 神戸新聞 (2023.4.9) に掲載されたプロジェクト

「ああまたこんなところにゴミ捨てられとるしよ。」とつぶやく子。「あとちょっと。頑張ってください!」と登山客に挨拶する子。もうこの頃になると、子どもたち

にとって南辺山は、他の山とはまったく違う、いわば自分たちの山になっているように感じられた。

4. まとめと今後の課題

児童生徒の資質・能力の把握と分析ツールとして本校が毎年実施しているアンケート「CoCoLo-34」の年度初めと年度末の結果を比較して見ると、以下の項目においてプラスの変容が見られた。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ① ストレスマネジメント能力 ② セルフコントロール能力 ③ 自尊感情・自己効力感 ④ 相談・支援を求める力 ⑤ 仲間づくり・絆づくりに質する力 |
|--|

また児童の活動のふりかえりには、「何のために」「だれのために」ということが分かる記述が実践前よりも明らかに多く見られるようになっている。これは地域(学校)の課題に対して「地域(学校)の一員」として向き合おうとする当事者意識の芽生えともいえる。

以上のことから、「オーディエンスのヒエラルキー」の観点を取り入れた学習設計は、学習者のモチベーションを高めるだけではなく、その他の資質能力の育成という観点においても一定の成果が得られたといえる。そして何より、自分たちを応援してくれる人が地域にこんなにもいるんだという実感は、今後も子どもたちが「地域の一員」としてまちづくりに参画していく上で大きな財産である。

なお本研究は、個別の実践において量的調査や質的調査を行ったわけではなく、年間を通してあらゆる教育活動を通して、子どもたちの変容や教員の手応えを見取り、整理したものでしかない。したがって本実践が価値あるものであるかの検証は今後も必要である。

しかし、このような他者からのまなざしを意識した学習設計は、直接的なフィードバックが得やすいというメリットも大きく新聞やメディアを見た地域住民からあたたかい声が年間を通して数多く寄せられることとなった。つまり、教員にとっても学校の価値を子どもたちと共有することができたのではないだろうか。本校の教員にとってもこの地域が「第二のふるさと」となるような教育活動を今後も続けていきたい。

参考文献

- ・川喜田二郎(2010)『創造性とは何か』祥伝出版
- ・ロジャー・ハート(2000)『子どもの参画』萌文社
- ・Berger, Ron(2014)『Leaders of Their Own Learning』Jossey-Bass